

# 春燈



April 2009

4

# 成瀬櫻桃子の句

## ネロの丘釣瓶落つ日と風ばかり

俳人協会日伊俳句交歓会 平成七年

羅馬の栄光を地に墮とした皇帝ネロ。その狂気の犠牲となつた人々の阿鼻叫喚の丘を眼前にした櫻桃子先生の鎮魂の祈りを込めた絶唱である。「ネロの丘」は、オルガン奏者によつて、グレゴリア讃歌と組み合わせられて作曲され、羅馬の駐バチカン大使公邸の「歌になつた俳句コンサート」では日伊の聴衆の感涙を誘つたと、当時の駐バチカン大使荒木忠男氏（俳人）は述べている。

青柳雅子

成瀬櫻桃子の句

# ブラツクホール賢治の夜鷹発信す

「俳句αあるふあ」二〇〇〇年増刊号

これは先生が二十一世紀に向けて詠まれた一句です。

賢治の「よだかの星」の夜鷹は、西空に耀くオリオンや南天のシリウスに向かって叫びますが、二十一世紀の夜鷹は、桁外れな質量故に光すら呑み込まざるを得ない暗黒の星ブラックホールに向けて発信します。

そこに先生の宗教性と、自然科学に対する憧憬の念と宇宙観を垣間見る事が出来ると思います。

佐々木 新

主宰の句

安立公彦

春を呼ぶ声とし聞けり明鳥

みどり児の踏みゆく大地日脚伸ぶ

寒明けの風にととのふ瀬音かな

だれよりも星よりも春来るを愛づ

耕人に遠嶺は雪を残しけり



# 燈下集

○ 中島和昭

身辺や婀娜なるものに飾り独楽  
夜のうちに研ぎし庖丁七種粥  
腹底に些かの違和海鼠噛む  
大寒のこの身一つをいとしまむ  
白梅に心通はせ寄せし鼻

○ 片桐てい女

海老蔵の睨みが目あて初芝居  
初鳶や離宮の庭の石配り  
使ひ残しし運に夜な夜な雪女  
陽炎や村の鍛冶屋も歌も消ゆ  
落椿うかと踏みたるよりの鬱

○ 宮崎安汀

釘箱に打つ釘さがす年のくれ  
初空や重なり晴るる甲斐信濃  
滋賀浦寄するさざ波初日かな  
初雀下り立つ顔の同じかな  
鱸酒を愛し銀座を徘徊す

○ 長谷川照子

春寒の鴉鳴きつつ飛びゆけり  
春寒や横書きの字の右上り  
水も空も樹も光り合ひ春きざす  
九十五歳を祝はれてをり春うらら  
何時の間に生き過ぎをりし彼岸かな

○ 渡辺鶴来

妻と摘む七種なづな子持村  
とことこと橋を渡つて万歳来  
くつさめや年寄るまいぞ寄るまいぞ  
丁寧に箸を使ひて凝鮓  
裏山へ鼯見に子を連れて

○ 西川保子

敦句の色紙に御慶申しけり  
こゑにして笈の小文や読始  
楽譜ひろぐ少女に隣り初電車  
あの日より十四年目の寒昂（神戸）  
ほつぽつと灯りぬ雪の降る町に



安立公彦主宰選

〈特々選〉

楽譜ひろく少女に隣り初電車

西川 保子

〈特選〉

初空にしばらく耳を澄ましけり

太田佳代子

初句会紙コップもて乾杯す

藤原 繁子

去年今年稚に欠伸をもらひけり

鈴木 直充

笹鳴や尺に足らざる木歩の碑

鈴木 鳳来

読初や窓辺を移る夕日影

松橋 利雄

ラジオ深夜便真砂女の句もて冬を告ぐ

片桐てい女

妻と摘む七草なづな子持村

渡辺 鶴来

負独楽の紐の汚れを握りしむ

三上 程子

生き抜いて賜ふ八十路の初明

小張 昭一

人日や父の机の羽箒

佐藤 信子

謹賀新年四隅の画鋏光りけり

近藤 牧男

産まれくる弟を待つ春著の子

沼田 桂子

〈入選〉

書き出しの硬き一字や初日記  
 なにもかも頬杖で受け四日過ぐ  
 刻々と海揚げゆく初明り  
 打ち下ろす間の佳かりけり歟始  
 父母に灯明ともす御慶かな  
 初明り仏間にしばしとどまれり  
 ふつりと酒との縁やかぶら汁  
 初春の川となりたる流れかな  
 御降りの雨だれ母の心音や  
 人形に小さき白き足袋履かす  
 結願の坂登りけり枇杷の花  
 鶴渡る母が居るから帰る里  
 潭身の祈り縊りこむ注連作り  
 津軽三味聞く夜は雪を想ひけり  
 追憶へ誘ふ賀状ありにけり  
 初夢を覚ます松籟母の郷  
 小鼓の締緒をほどく淑気かな  
 齋打つネールアートの小指立て  
 焼網の網目正しく雑煮餅  
 人のみなやさしく見ゆる今朝の春  
 腑に落つることのみ二三初筑波  
 しあはせはおのが心に結び昆布  
 初鏡髪撫でつける幼き手

野崎 昭子  
 松本 峰春  
 高橋 和女  
 綱 徳女  
 栗原 完爾  
 佐藤 玲子  
 岩井 泉樹  
 三代川玲子  
 武田 巨子  
 井上 正子  
 乗鞍 三彦  
 鷹崎由未子  
 久保 久子  
 渡邊 泰子  
 吉川 隆  
 小島 禾汀  
 河本由紀子  
 柴崎甲武信  
 矢口 笑子  
 小宮 淳子  
 上山 永晃  
 小菅 礼子  
 横山さくら

年越の弥撒や司祭の声低し  
 みづくきのほのと白寿の追賀状  
 初鏡髪染むる気の無くはなし  
 淑気満つ鍔絵の白虎蔵座敷  
 初夢や稲荷に小さき真砂女の背  
 まゆ玉の集ひや女弟子ふたり  
 初鶏の四五羽遊ぶや神の庭  
 天与の八十路膝を正して福茶かな  
 源氏絵巻繰つてふたりの春隣  
 初春や合掌屋根の深呼吸吸  
 病む姉と小さき重話分かちけり  
 淑気かないま老い松の日を鎧ふ  
 人日や動物園に群るる人  
 初東雲風に色出できたりけり  
 群鴉の羽音残して冬ざるる  
 広辞苑六版付録読初め  
 松過ぎてまた独り身の無聊かな  
 古墨でて滲む大字や筆始  
 昼月や笛鳴の影せはしなき  
 みどり児の熟睡の窓の初明り  
 初風の檸檬いろなる鳩の海  
 注す水の玉と走るや初硯  
 葉牡丹や渦の深みに力溜め  
 こ糸にして笈の小文や読始

江草 礼  
 益田寿美子  
 橋本 リエ  
 豊谷 青峰  
 廣瀬 克子  
 中野 英伴  
 久本久美子  
 赤岡 茂子  
 和田 孝村  
 秋場 貞枝  
 田嶋 洋子  
 佐々木 新  
 林 紀夫  
 割田 容子  
 吉村さよ子  
 平野加代子  
 勝原 文夫  
 諸戸せつ子  
 柴崎 富子  
 村田 馥世  
 片山 博介  
 松本 俊介  
 永島 雅子  
 西川 保子

# 当月集

安立 公彦選



○ 坂入 妙香

どの枝も冬芽ゆたかに大擧

夫の名を墓誌に刻みて年果つる

遺影笑むマツチ一ト擦り初灯明

夫の顔重ねて見たし初鏡

記す事仏事のみなり初日記

○ 豊谷 ゆき江

乗継ぎの駅のホームや日脚伸び

臘梅や茶室につづく石畳

風呂吹や夫にやさしき嘘をつき

運不運強きに生きて寒卵

一頻り泣きし笑顔や雪丸げ

○ 竹内 慶子

音もせでうねる海原明の春

初風や総の山なみたひらけき

白帆ゆく海煙めけり初電車

朝粥や海開けたる冬座敷

手術後の旅を約せる四温かな

○ 長谷川 青雅

夜を籠めて石見銀山吹雪をり

雪女出番待つ間の卵酒

子の去りし路地の広さや牡丹雪

聖堂に星の欠片の氷柱かな

難題は山積み葱は小刻みに

○ 河本 由紀子

小鼓の締緒をほどく淑気かな

たをやかに大繭玉の宴かな

我や先ひとや先の世冬の賜

咳のいつしか母のそれに似て

夫の顔つくづく眺むる炬燵かな

# 春燈の句

安立 公彦選

赤松の木肌息つき寒夕焼

千葉 中村紀美子

神木の千本公孫樹冬芽垂る

マスクかけ美醜くもらす眼鏡かな

歌舞伎座の前に人待つ春シヨール

天地の容整ふ初景色

稚の爪ほどの花びら冬桜

子等の声絶えし団地や霜柱

柵を挿して無住寺開かずの戸

古書街へ坂ぶらぶらと日脚伸ぶ

枇杷の花母校は今も古書の街

冬菊や友垣のみな古稀となり

小走りに成人の日の晴着往く

七種のうた口遊ぶ厨窓

新年の宴や昭和語り合ひ

朝夕に笹鳴く宿や枇杷の花

野歩き足はづみけり春立つ日

初春や水は豊かに空映し

千葉 海村 禮子

水仙の花のたかさに屈みけり

底冷や五百羅漢の千の耳

シヨールの端つまみ離しては葉待つ

「雪が降る」原語で歌ひ友逝けり

冬の鶯断固動かず声上げず

探梅の子犬抱き来る漢かな

梅が香や万葉集など繙かむ

供華剪れば青く匂へり寒明るる

出るはずの草の芽を待つ花壇かな

朧夜の音のひとつにオルゴール

春愁や吸取紙に残る文字

荒縄の結び目固き松飾

いつ来ても留守の交番注連飾る

初春の快ふれあふ浅草寺

会釈して膝送りする初法話



東京 小島 昭夫

東京 安藤 利恵

東京 渡辺 若菜

# 余言

安立公彦

伊庭心猿訪ひし日遙か真間の春

生田 高子

一月の末、思い立って石川桂郎著『俳人風狂列伝』を読み返していた。この本には十一名の俳人がとり上げられているが、その中に、高橋鏡太郎、伊庭心猿、田尻得次郎という三人の「春燈」の先輩が名を連ねている。

「風狂」とあるからには、今時の紳士淑女俳人でないことは分かる。しかし「風狂」という言葉には、そういう人たちを含む私たちの至り得なかつた何かが存在する。詳しくは角川選書の一本をご覧頂きたい。なお心猿については、『俳文学大辞典』に小室善弘氏の解説がついている。また『年譜―春燈の六十年』の昭和二十八年から没年の三十二年の間に、心猿の書いた文章のリストが出ている。

この列伝を読んで間もなく、四月号の投句の中に、作者

の句を見た。選句をしているとこういう偶然もたまにあり得る。

前置きが長くなった。作者はかつて何らかの用事があって心猿を訪ねたのだ。心猿の家は市川真間の手児奈堂境内にあった。私も吟行の途次その旧居の前にはしばらく佇んだことがある。今はどうなっているのだろうか。

近くに真間山弘法寺がある。この境内には秋櫻子、風生の句碑が建っている。心猿の来し方と比べその句碑の何と立派であることか。しかし「真間の春」には、世俗の褒貶をとともに包み込んだ大らかさを感じられる。作者もおそらくそういう思いでかつて訪れた伊庭心猿をふり返っているのではなからうか。

ホスピスに羽子つきの音届けけり

堀内 五輪

ホスピスという言葉は、現代では私たちの日常のすぐ近くに存在する。日本で初めてホスピスが試みられたのは、二十八年前とのこと。

作者は今その施設で生活している。そこでは、へ死に触るる言葉短し寒灯下〜という思いが日常の中にある。しかしホスピスの目的は決して後向きな姿勢ではない。その言葉の訳文が「宗教団体などの宿泊所の意」とあるように、自分の持ち時間を最善に全うするところにある。

しかし病む身にかすかに届く羽子つきの音は、ホスピスという言葉を改めてこころに印すものであろう。下五が「聞えけり」でなく「届きけり」と、自らの意志の外にあるのも心うたれる表現である。

この句はまさに現代の一面を切りとつた俳句と言える。作者のご養生を切に願うものである。

どの枝も冬芽ゆたかに大櫛

坂入 妙香

ふとこころの深い写生句である。「冬芽ゆたかに」が無理なく「大櫛」に誘う。

俳句本来の表現は「一句独立」である。そしてこの句はその表現を良く咀嚼している。

しかし第二句目から内容は一転する。四句を読み了えてまたこの句に戻ったとき、私たちは「ゆたかに」の表現に立ち止まる。この冬芽を仰ぐ作者の胸中には、亡き夫の姿が揺曳しているのだ。「ゆたかに」は単なる写生を越えた作者の思いとして見る人の心を捉え直す。

それだからと言って一句独立の表現にはいささかの影響も与えない。俳句というものの持つ強靱さと言えよう。

乗継ぎの駅のホームや日脚伸ぶ

豊谷ゆき江

乗り継ぎの駅のホームで電車を待つということ、私たちの日常には普段にあることだ。しかし誰れもそのことを

句にしようとは思わないし、またそういう時は俳句そのものが考えの将外にある。作者はそれを「日脚伸ぶ」と付けて一句にまとめあげた。

高浜虚子に『虚子俳話』という読物がある。(昭和三十八年東京書房刊)。その一章に虚子は「存問」ということを書いている。「日常の存問が即ち俳句である」「存問は挨拶に通う」。それを敷衍して山本健吉は、「虚子の存在の揺るぎなさは、俳句を『日常の存問』として、刻々のうちに俳句に生きていることに在るのであろう。」と補足する。

乗り継ぎの駅のホームで、ふと春も近いと思うところが存問である。そしてこの句は、この時期の街で見聞する季節感をみごとに一句に集約している。

初風や総の山なみたひらけき

竹内 慶子

生活の四囲に山のある地と無い所では、そこに住む人の人間形成にも大きな違いがあることだろう。山頂から登る朝日には清澄の思いがある。その山頂をぎりぎりに低くしたのが、下総上総安房の山なみだ。しかし清澄の思いはいささかも失せない。

地図上の形から見て、古代土器に似た千葉という地域には、今でもどこかに古代の大らかさが残っているような気がする。作者はそれを、「総の山なみたひらけき」と詠い上げたのだ。「初風」の季語が絶妙である。